

研究論文

日本における憑依研究の一側面

—精神医学の視点から—

大宮 司 信

北翔大学人間福祉学部

抄 録

日本における憑依の精神医学的研究の歴史を、宗教をひとつの要素として加え検討した。女性の教祖のばあい、日本では憑依体験をもとに宗教を始めた例が多く、苦しい生活を送った女性の心の回復のひとつの型として考えた。また人格の変性という点で共通する解離に関する精神医学研究が最近増加していることが明らかとなった。

キーワード：憑依，精神医学史，宗教

Ⅰ. はじめに

筆者はこれまでアイヌのイムという現象や、日本におけるオウム真理教と世界のいわゆるカルト宗教の近年における動きについて本年報で報告してきた^{1,2)}。

こうした研究に関連して、筆者は日本においては「人間に何ものかが憑く」憑依という現象を抜きにして宗教を考えることは難しいと思いつている。

例えば幕末から明治にかけて成立した近代日本の代表的な宗教である天理教や大本教は、中山みきや出口なおの神がかりという形の憑依で始まっている。

一方、憑依は精神医学の中でも取り上げられて病気の一部として語られる。そうした視点からは宗教における憑依を、精神医学からみていく視点が成立する³⁾。このような事情を前提・背景にし、日本において憑依という現象が精神医学の中でどのように取り上げられてきたかを振り返ることには一定の意義があると考ええる。

また後にも述べるが、筆者は憑依の中核を人格変換と考えており、そうした観点からは近年わが国でも症例報告が続出した多重人格や解離状態も憑依と無縁ではあるまい。

以上述べた諸点をふまえながら、本論考では精神医学から見た憑依の日本における研究を歴史的に振り返り、宗教との関連も付加しながら考察してみたい。

Ⅱ. 憑依とその心理

人間に狐や狸がのりうつったり、仏が憑いたりするという現象は憑依と呼ばれている。筆者は精神医学の立場からこれを2つに分ける。

ひとつは、「憑いた」という確信に焦点をおく「憑依妄想」である。この場合は確信が中心であるから、狐や狸の姿に似た振る舞いに至ることは必ずしも必須ではない。

もうひとつの「憑依状態」は、狐や狸が乗りうつり、実際にそうした態度を示す状態である。この場合には外面に現れた状態が中心で、「憑かれている」という確信・度合いは、特に急性期では本人から必ずしも述べられない場合があり必須ではない。ただし通常は精神症状の安定したあと、事後的に確認できる場合がほとんどである。

筆者はこのうち後者、すなわち憑依状態を憑依の中心としてこれまで研究をすすめてきた³⁾。憑依状態にはこのように外面に言動異常が現れ、憑くもの（憑依者）は神・狐などの特異的、超越的な性質をもっているといった特徴があるが、その中心は人格変換である。

普段我々の心は、例えばヤスパース⁴⁾の言うような自己意識によって充満されているが、それが変化・流動化し、「自分が自分ではない」といった状態になることがある。これを変性意識状態（altered state of consciousness）という。

さらに進んでまったく自己が消えてなくなってしまう

脱自 (ecstasy)、空白になった心の中に何者かが入ってくる憑依 (possession) を考える。また自己意識が分離することに焦点を当てれば解離 (dissociation) になる。

筆者はこうした変性意識状態が憑依状態に出現し、それによる人格変換体験を憑依の最も重要な要素と考える。一方、最近の精神医学の疾病分類、現在頻用される DSM や ICD などの操作的診断においては、憑依状態は脇へ追いやられ、解離が中心に置かれている。

憑依妄想であろうと憑依状態であろうと、何かに取り憑かれたという俗信は古くから存在していた。このうちのあるものは病気として治療の対象になり、癒されるべき状態として位置づけられる。その一方で憑依によって人々の信頼を得たり、宗教を開いたりする教祖もいる。多くの人々がこうした宗教に集い、教祖の憑依体験を追体験したり、派生した宗教儀礼によって生き甲斐を見出すようになる。このように憑依は二つの面をもっている⁵⁾。

Ⅲ. 日本における憑依の精神医学的研究史の概略

精神医学に立つ憑依の研究は、明治期以降、主にドイツからもたらされた精神医学が日本に着床して以降のことになる。もちろんそれ以前にも和・漢の医学からの憑依に対する見解はあったし、医学的な視点以外からの憑依の記述も多数にのぼる。以降の論述に先がける形で、ここではその歴史的概略にふれておきたい (一定の時代に特化して詳論している研究もある。優れた代表作に明治期を中心に検討した岡田の狐つき研究史がある⁶⁾)。

図-1 に明治期以降の憑依に関連する精神医学論文数を示した (論文数の調査資料は、1993年以前の文献の場合は河東⁷⁾の「憑依をめぐる精神医学略史と文献目録」などを用い、1994年以降は医学中央雑誌で「憑依」をキーワードとして検索した)。縦軸の分類は論文内容からその主な論述点・立脚点と考えられるところにもとづいて筆者が分類した。従って2つ以上にまたがる論文も若干あり、また筆者の恣意が分類の実際に入っている可能性は否めない (ここで言う「文化」という項目は、これまで集積されてきたシャーマニズムや憑依の背景となる文化背景を念頭においているが、具体的には比較文化精神医学や多文化間精神医学の視点を意識したものであり、この点については後述する)。

論文数は全体として1960年代から増加している。まずシャーマニズムに関する研究において、その入巫過程や、巫女 of 精神医学的問題などがとりあげられ、平行して (あるいは若干遅れて) 風土・地域と憑依との関係が

論じられるようになる。勿論、医学・精神医学論文を発表できる雑誌の増加といった要因も可能性のひとつとなろう。ただしそれ以前からも、憑依状態を呈した症例の報告は散見されている。

臨床例の報告を中心として1970年代以降も憑依関連の論文は同様の発表数の増加 (40篇) を示す。この動向では西山⁸⁾のいう「ターニング・ポイントとしての70年代」という構想との一致に興味がひかれる。すなわちこの年代が日本の経済状態の変化に伴う国民意識とライフスタイルのターニング・ポイントであるばかりでなく、西山のいう「霊＝術」系新宗教の流行期を迎える年代であり、精神科医もそうした時代背景の中にあったことは忘れてはなるまい。

1980年代も論文数は45篇と多く、臨床報告例も増加し、引き続きシャーマニズムや地域特性が論じられたりもするが、高校生を中心に流行したコックリさんに憑依された例や、たとえば後にふれる真光教系の「手かざし」と関連する症例など、宗教・教団との関係もとりあげられるようになる。

またひろく文化のなかで憑依を考える姿勢も前面にあらわれ、病気としての憑依だけではなく、地域や生活に密着した憑依の意味が言われるようになる。

最近でも憑依の報告は決して少なくなったり、なくなったりせず、一定の論文数を保持しているが、一方、憑依と近縁の解離に関する論文が急増し、精神医学の中のトピックスのひとつとなってきた。

以下このような憑依研究の歴史を踏まえながら、憑依、特に憑依状態が日本人の心性とどのような関連をもつのか、今ひとつのパラメーターとして宗教の動向を加えて考えてみたい。

Ⅳ. 地域と憑依

西洋からもたらされた精神医学をふまえ、明治期には新たに設立された精神病院、また山陰・四国などをはじめとする遠隔の地において、憑きものに関する調査・研究がおこなわれた。それらの中には榊⁹⁾の研究や島村¹⁰⁾の膨大な調査がある。

そこには日本古来から伝わっている迷信を西洋医学によって打破しようとする意気込みが背景にあったことが感じられる。西洋に追いつきたいという国全体のベクトルが、憑依研究という小さな部分にまで及んでいるように思う。

周知の森田¹¹⁾の祈祷性精神病は、古来から日本でみられ、また明治期の調査によって明らかにされた憑依を精神医学の中に位置づけようとする研究の集大成であり、さらには金字塔といえるものであろう。それ以降の臨床

報告はしばしばこの祈禱性精神病を巡って論じられることになる。

地域との関係では「ある地域ではいまだに憑依がみられる」という文脈で、精神医学の視点から各地の憑依症例を現象発見的に取り上げた論文や記録の集成が、こうした方向の論文が連続して現れ始める1960年代以降現在に至るまでみられるが、このような研究の結果、狐憑き・狸憑き・おさき憑きといった地域独特の憑きものの研究は精神医学の面からも進んだ。

狐や犬神に憑かれて困る者、家から家へと狐や犬神が憑いて回る狐持ち・犬神持ちという家族関係、憑きものを落とす憑きもの落としは、濃淡は地域によって様々であるが一体になって地域に伝達されてきたと考える。

この研究の方向は日本の特殊な地域を対象とするだけでなく、アイヌ民族、満州、韓国などにおける研究へと広がっていった。このうち内村¹²⁾のイムに関する研究は必ずしも憑依研究と直結するものではないが、ヒステリーの原型として位置づけた点に意義があるといわれている。

V. シャーマニズムと憑依

一方、明治以降の精神医学はシャーマニズムの解明にも関与しており、1960年代以降に憑依をシャーマニズムや地域との関係から論ずる論文が出現している。こうした論文群の10～20年後には、比較文化精神医学、今日の多文化間精神医学的な視点から、さらに広く文化との関連を考察に含む論文が出現する。

西村¹³⁾は東北地方のシャーマニズムを調査し、憑依のもつ癒しと病理の両側面が人々の心の中にある愛と呪いの契機と結びついていることを見いだした。共同体の内にあって相互に大事にし合おうという心性と、逆に恨みをもち相手を呪うという心性が共存し、これが憑依の2つの方向性と関連があるという。

またアイヌのイムに関する、最近の高畑や七田¹⁴⁾の研究によれば、イムはむしろアイヌの人々の精神的な慰安・安定の為の役割を果たしていたという。イムによって人々はある種の祝祭的な雰囲気を感じ、更には人々との交流に寄与していたというのである（ちなみにアイヌにはトゥス（北海道・千島）、サマン（樺太）というシャーマニズムが存在するが、こちらの方が憑依状態により近い）。

それまで精神の病気と考えられていただけの憑依状態のなかに、むしろ精神保健的な要素が見て取れるという指摘は、憑依を文化あるいは文化圏のなかで捉え直すという視点から生まれた。こうした視点は逆に精神医学自体の姿勢・視点の変更をうながすことにつながるだろう。

VI. 新宗教と憑依

幕末から明治にかけて成立した宗教（様々な定義があるが、本論ではとりあえずこれを「新宗教」と呼んでおく）の中には、憑依体験を出発点として開教されたものが少なくない。中山みきによる天理教、出口なおによる大本教はその代表である。彼らがいずれもその時代においては名のない、社会の中心とはなり得ない出自の女性であったことは特記すべきであろう。

また幕末から明治という、封建体制から近代に脱皮する大きな変革期・転換期に、こうした宗教が出現した点も注目すべきである。

憑依状態が宗教儀礼の中にみられる宗教もある。例えば円応教の「修法」と呼ばれる儀礼もその一つである。この儀礼では宗教的指導者層が憑依ないし変性意識状態となってお告げを告知することになるので、いわばプロが憑依する状態であるからあまり大きな問題となることはない。

一方いわゆる真光系教団では憑依状態になるのは一般信徒や来談者であるため、遷延するなどの病理症状を呈したり、残存することがある。

表-1に憑依状態のもとに宗教ができあがった新宗教を示す。多くは教祖が憑依状態になって、いわゆる神がかって開かれた宗教であるが、中には同胞が神がかった憑依状態となったことを契機に開教された教団もある。

幕末・明治期の新宗教の苦難の一つは、国家神道との対立・闘争であった。もちろんそれは宗教間対立ではなく、国家による宗教・思想の統一と、新宗教の教義の独自性のあいだの闘いであった。

宗教的・組織的な面だけをみれば、神道系の各新宗教は神道系列のなかの一部の位置を獲得できたが、問題はその思想的・信仰的面である。例えば天理教の中山みきは国家神道の奉じる創世神話にたいして「こふき」（泥海古記）を対置し、国家神道と対立した。

また時代は下るが、大本は「みろくの世界」という独自の未来世界像を提示することにより、結果として昭和初期の天皇制ファシズムと対立することとなり、有名な大本弾圧につながった。

この二つの教団の例をとっても、そのなかで教勢拡大と国家との協調を念頭に、教義の柔軟化や教祖の追体験とも考えられる信仰儀礼の改革を求める後継者・組織者との間にしばしば教祖は教団内部での争い・論議をおこなっている。このような外・内における闘争のエネルギーの原点の一つは、彼らの開教時の憑依体験ではなかったかと筆者は考えている。

ここで思い起こされるのが高橋¹⁵⁾の挙げる「地位の逆

転現象」である。高橋の記載によれば、東北地方のイタコあるいはゴミソでは、その成巫過程の中で、それまで夫に虐げられもっぱら忍従を強いられてきた女性が、神がかりとなって憑依状態を呈するだけでなく、さらに地域の小さな宗教として機能するようになると、夫が妻に従うようになり、妻が教祖で夫がその助手というミニ教団の形態をとると同時に、家庭自体も波風が立たなくなる現象が起きるという。

すなわち憑依という現象は、このように女性の弱い立場を一転して強くし、人々に対してものを言う力を与えるのである。もちろんこれは憑依に限らず宗教が成立する時に見られる契機でもある。蓄積的に築きあげられた教理・妄想着想にも通じる天啓的な確信体験・幻聴による啓示体験は上述したような信念・確信をもたらし、行動へと導くことになるであろう。

教団が大きくなるに従って、当然周囲社会、とくに国家との調停を図る必要が生まれる。また教祖の残した奇妙な理解しがたい文章を人々にわかりやすく伝えなおすという操作も教団の膨張と共に起きてくる。

このような中で新宗教は人を得て大教団となると同時に教義や教団組織の整理が行われていった。大本における出口王仁三郎はその代表である。そうした流れの中で教祖の持っていた時代に対する神の声の役割は小さくなっていき、変わって誰しもわかるような日常的な道徳が教えの中心となったことが想像できる。

一方、教祖の開教時の憑依状態をあたかも追体験するような宗教儀礼も時代によって変化し、また教団が大きくなっていく過程で、その位置づけ・意味づけも変化していく。先に記した真光系の新宗教でも、当初病理的な方向をしめした儀礼がしだいに信徒に癒しを与える方向へと変わっていつている。

VII. 最近の動向：解離性障害の増加

従来憑依状態は特殊な地域における、いわば精神の風土病とみなされてきた一方、操作的診断では以前から解離性障害の一つと位置づけられてきている。本論文の冒頭で述べたごとく、憑依と解離という表面的な相違ではなく、ともに意識の変性状態という点で通底しているという視点からは、憑依状態に関する論文数とともに解離性障害の論文数の様相にも目をむけるべきであろう。

図-2に1983年以降の憑依および解離をキーワードにした論文数の年次推移を示す。2000年までの約15年間は両者ともにほぼ一定の論文数で、解離関連の論文数に比べて憑依関連の論文数のほうが多い。1983～1998年の16年間の年間の平均論文数は解離関連：2，憑依関連：6である。ところがそれ以降では解離関連の論文が激増す

る。1999～2008年の11年間の年間の平均論文数は解離関連：22，憑依関連：5である。

憑依関連の論文数があまりかわらないのに比べ、解離関連の論文数は年間平均で10倍になっている（最も2005年をピークとして最近は減少傾向にあるが）。この結果からは、変性意識状態を基盤とする病理の表現形態が憑依から解離へと変化しつつあることを示唆するのかもしれない。

一方、例えば自己啓発セミナーに参加する中で、変性意識状態による精神運動興奮状態を来するような症例の報告¹⁶⁾なども目につく。野崎¹⁶⁾はこの病態を現代的な祈禱性精神病として位置づけている。

同時に変性意識状態に根ざす宗教儀礼の扱い方も教団側でうまく制御するようになり、いわゆる真光系の信者の「手かざし」儀礼後の精神症状出現の報告例も以前ほどではなくなったように思われる。

このような報告は、解離とは異なる、憑依のいわば不全型の病理や、教団独自の憑依・変性意識状態の制御という新しい事態の出現を予測させる。

VIII. ま と め

憑依状態の精神医学研究の歴史をふりかえり、そこへ宗教を加え検討してみると、日本人の心性の歴史の一端に次の諸点を加えるのではないかと考える。

1. 明治期以降の新宗教の教祖が国家と対立しようと意図できた背景には勿論多くの要因があるのだろうが、憑依によるみずからの宗教者としての能力への信憑とともに、高橋のいう「地位の逆転現象」にモデルをおくようなドラスティックな体験もその一要因として加えられるのではないか。特に女性教祖に多いことを考えると、日本における追いつめられた女性の心的回復のひとつのパターンとして考えてよいのではないか。
2. 精神医学が病気として捉える憑依状態に文化という要因を織り込んで再見すると、場合によっては精神保健的な側面も見え、憑依の多面性を物語る。憑依の消失は同時に、われわれの心性のなかから、このような部分が消失したことでもある。
3. 最近でも憑依関連の精神医学論文は引き続き出現しているが、解離に関する論文が最近増加してきた。また憑依という形態でなく、より無定型な変性意識に関連する病理の出現も予測される。

脱自・憑依という形をとらなくても、精神はなんらかの形で変性意識に親和性をもつ。日本に特徴的と言われる「何かに憑かれる」ことは精神の病理だけでなく精神の健康に不必要なことではないのかもしれない。

(付記) 本論文の内容は第13回日本精神医学史学会のパネル「憑依をめぐる日本人の心性史—民俗学と精神医学の対話」にて発表した。

【文献】

- ¹⁾ Daiguji, M.: Imu phenomena observed among the Ainu people in northern Japan: past and present, 北翔大学北方圏情報センター年報, 4号, 1-4 (2012)
- ²⁾ Daiguji, M.: A psychiatric aspect of new religious movements, 北翔大学北方圏情報センター年報, 5号, 17-22 (2013)
- ³⁾ 大宮司信: 憑依の精神病理—現代における憑依の臨床—, 星和書店, 東京 (1993)
- ⁴⁾ Jaspers, K.: Allgemeine Psychopathologie, 5-Aufl. Springer, Berlin Heidelberg (1948)
(内村祐之他訳: 精神病理学総論, 岩波書店, 東京. (1953-1956))
- ⁵⁾ 大宮司信: マインドフルネス・瞑想・坐禅の脳科学と精神療法, 新興医書出版, 東京 (2007)
- ⁶⁾ 岡田靖雄: 狐憑き研究史—明治時代を中心に, 日医史誌, 29: 368-391 (1983)
- ⁷⁾ 河東仁: 憑依をめぐる精神医学略史と文献目録, AZ, 32号, 167-174 (1994)
- ⁸⁾ 西山 茂: 第四次新宗教ブームの背景, 現代のエスプリ, 292: 34-43 (1991)
- ⁹⁾ 榊俣: 狐憑病に就て, 哲学雑誌, 8: 1259-1353 (1893)
- ¹⁰⁾ 島村俊一: 島根県下狐憑病取調報告, 東京医学会雑誌, 6: 699-705, 769, 778, 981-986, 1049-1054, 1141-1146, 1892, 7: 124-128, 233-236, 468-471 (1893)
- ¹¹⁾ 森田正馬: 余の所謂祈祷性精神症に就て, 神経学雑誌, 14: 286-287 (1915)

- ¹²⁾ 内村祐之, 秋元波留夫, 石橋俊実: あいぬノいむニ就イテ (あいぬノ精神学的研究, 第1報), 精神誌, 42: 1-69 (1938)
- ¹³⁾ 西村 康: 南部地方の憑依症候群をめぐる文化精神医学的研究, 精神医学, 18: 1261-1269 (1976)
- ¹⁴⁾ 高畑直彦, 七田博文: いむアイヌの一精神現象, 私家版, 札幌 (1988)
- ¹⁵⁾ 高橋紳吾, 柴田洋子: 憑依感応型精神病における当事者間地位とその逆転現象—症例を通じて, 東邦医学会雑誌, 30: 132 (1983)
- ¹⁶⁾ 野崎裕介, 岡田吉郎, 荒井稔, 他: 自己開発セミナーによって誘発された短期反応性精神病の一例—現代日本における祈祷性精神病としての側面から—, 臨床精神医学, 21: 1691-1696 (1992)

An aspect of the research of possession in Japan from a psychiatric view

abstract:

A history of psychiatric research of possession in Japan was examined. Religion was added as one element. In the case of the female founder of a religion, there were many examples which began religion based on possession experience, and they thought in Japan as one model of recovery of the heart of the woman who led the painful life. Moreover, it became clear that the psychiatric research on the dissociation which is common in respect of the altered state of consciousness increase in these days.

key words: possession, history of psychiatry, religion

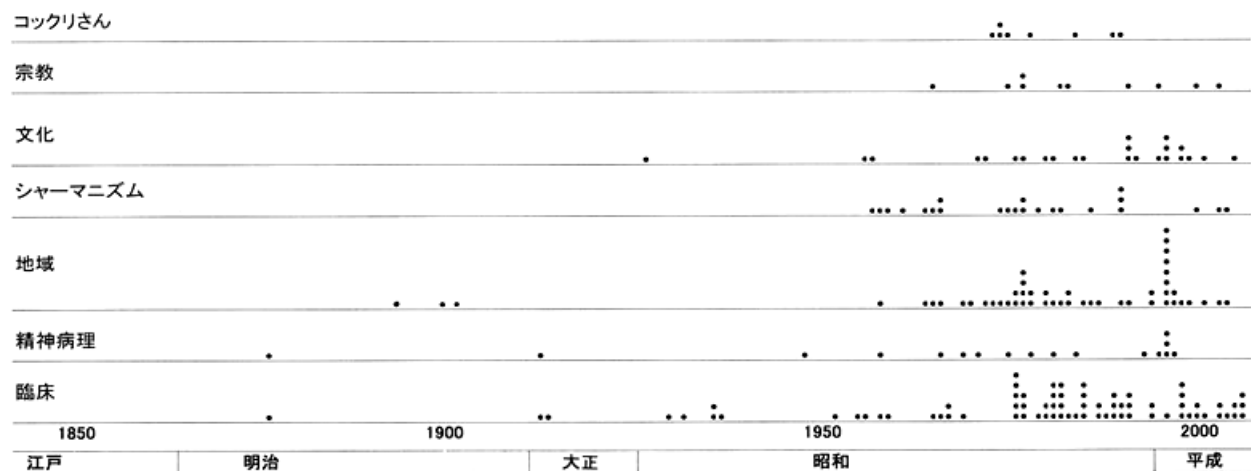


図 - 1 : 日本で公表された憑依に関する精神医学的研究の論文数

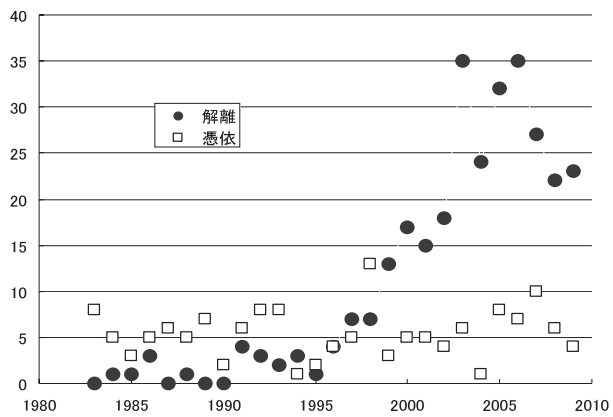


図 - 2 : 年代別の憑依と解離に関連する論文数

表 - 1 : 憑依によって開教された新宗教

系統	名称	開教年	信者数
1 諸	天理教	1838	1,892,498
2 神	金光教	1859	433,340
3 神	大本	1892	173,653
4 諸	朝日神社	1909	2,000
5 神	すめら教	1919	1,780,085
6 諸	円応教	1919	444,384
7 キ	イエスの御霊教会教団	1933	39,000
8 諸	大日然教	1940	3,640
9 神	至恩郷	1944	2,000
10 諸	天照皇大神宮教	1945	448,357
11 仏	大法輪台意光妙教会	1945	59,690
12 諸	生天光神明宮	1954	6,000
13 諸	甘露台霊理斯道会	1975	1,300